

既に在留邦人など大勢の方が、帰国の移動を始め  
ておりました。そこで乗っていた汽車は邦人に明  
け渡し、兵隊は張家口から一週間掛かって天津に  
戻りました。もう既に鉄帽や毒マスクなどの装備  
は捨てて天津に集結、武装解除となりました。

収容所生活に入り、天津の農場の警備や米軍の  
使役にも出ました。

復員は、昭和二十一年二月十一日、米軍の上陸  
用舟艇M84で佐世保港に上陸し、同日召集解除と  
なり、これで私の三回に及んだ召集と軍隊生活は  
終了しました。

### 中支作戦に参加して

京都府 出口 順市

私は、昭和十五（一九四〇）年十二月一日召集  
により、京都府岡崎勤労会館において入隊の手續  
をしました。ちょうど、若葉会館に分宿すること  
が指定されて、ほかの地区から入隊する方々を四  
〜五日待っていました。

昭和十五年十二月五日か六日でした、一緒に大  
阪港より出航し中支のタークというところに上陸、  
天津を経て石太線にて榆次へ、七里ほど歩いて部  
隊に入隊しました。

入隊した部隊は次の部隊でした。

北支山西省独立歩兵第四旅団第二中隊

片山部隊 菊田部隊 山田隊・山田大尉

入隊すると、片山師団長、菊田旅団長からそれ  
ぞれ訓示があり、緊張の一時でした。そこで初年  
兵の教育が始まったのですが、教育、演習をしな

がら、実弾を携行しての作戦や討伐、警備等に当たりました。実戦での教育ということでした。

昭和十六年一月、楡社付近掃蕩作戦に参加、すぐ二月には、東部武郷掃蕩作戦に参加しました。東村に駐屯中に、大隊本部へ転属となり、喇叭手としての修業をし、その修業が終了後、指揮班にて復帰しました。

以後の参加作戦を申し上げますと、次のものがありました。

昭和十六年五月 中原会戦（一〇〇号）

八月 普察翼辺区南正作戦

十一月 第二普中作戦

昭和十七年三月 冬季山西嵐作戦

五月 普翼予辺区作戦（〇号）

六月 南部大行作戦

十一月 秋季山西肅正作戦

昭和十八年四月 春大行作戦

そして昭和十八年六月に、楡次の第一八八二部

隊勤務となりました。ここは第六十二師団司令部で、その衛兵隊喇叭手として勤務に着きました。当時の衛兵隊長は篠喜一中尉でした。

その前の昭和十八年二月には、京漢（河南作戦）に参加のため黄河北岸に集結、霸王城より攻撃が開始され、これに参加しました。

そうこうしている内に、昭和十九年八月、中支戦線より沖縄へ派遣となり、八月二十日、沖縄に上陸、上陸後、直ちに首里を経て前田小学校へ行き、ここにて毎日々々付近にて防衛準備に取り掛かった訳です。

十二月頃より、師団司令部は、前田より首里城下へ移動しました。

この時の我が師団、第六十二師団長の本郷中将は、関東防衛司令官として沖縄より去ることとなり、後任に藤岡中将が着任されました。師団の衛兵隊は本郷中将の後任・藤岡中将の護衛に着きました。

当時米軍は、四月一日、沖繩に上陸、我が軍は米軍の上陸後は、ますます戦闘は護りの戦闘となり、後へ後へと後退し、後は小さな島しかなく、行く場もない有様でした。遂に津加山にて本隊は魔文仁と山城とに二分して、別れて出発しました。

参謀部と管理班、衛兵隊は山城へと行動しました。そしてここ山城から戦闘が始まったのです。

六月二日より二十一日早朝にかけ、米軍は戦車を先頭にして攻撃を開始し、我が軍に砲弾を打ち込み、北九に向かった。我が部隊は攻撃するも負傷者が多く、戦死者も多く出ました。

ちょうど、午後四時半頃と思うが、戦車砲弾が岩陰に飛来し、その弾みに私の足首に、その戦車砲弾の破片が当たり負傷しました。

翌日、戦闘に出たのですが、敵は相次いで火焰放射による攻撃を継続し、我が方には壮絶な戦死者が多くなり、兵隊は壕内に入り込む一方となりました。

二十一日、元気で歩行できるものは斬り込みに出て行き、皆帰らぬ者となったのですが、歩けない者は壕に残って助かりました。五、六人いたと思います。

お陰様にて、山城では攻撃は受けず、敵兵も日本兵を気にせず、その時の戦闘は米軍も、山城では手向かわない者は相手にせぬようになりました。それで洞窟内では負傷兵の生活が始まったのです。

洞窟内は昼夜なにも見えぬ真つ暗な有様で、何日であったか忘れましたが、数日後、呼び出しがあったのですが、誰も外へ出る者はいなかったのです。

その後、何日過ぎたころかと思いますが、私一人で壕を出て行き、洞窟の外にて数日間付近を見ていると、敵兵二人と日本兵が近付き「喇叭手ではないか、戦いはもう終わったのだ」と言って、付近の民家の木陰へ連れて行かれ、そこで水やパン食やタバコを出してくれました。

私は、ただ水が欲しいと言いたくても通じることなく、手で口許を指して語り掛け、水を貰うことができました。

その後一時間ほどと思いますが、自動車がきて民家のある所へ行って負傷した所の治療をしてくれました。

民家の中へ入ると五、六人の負傷兵がいて、その中の一人に秋田県の曹長・藤原要次郎さんがおられました。「師団の兵は君と二人だ、みんなは知らないしているか」と言われました。

そこに三日ほどおり、さらに自動車に乗せられ石川收容所へ送られましたが、ここに来て見ると、多くの兵隊がいました。私はその後、病院生活となったのです。

昭和二十年一月三日、沖縄より病院船にて横須賀へ、七日に、横須賀陸軍病院の分院に入りました。十日ほど経つと、今度は千葉県柏の陸軍病院へ送られ、一カ月ほどしてより、京都国立病院へ、さらに一カ月ほどして福知山国立病院へ送られ、

傷も良くなるが、昭和二十年四月二十日退院しました。

その後、国立病院へ通院、京都国立病院へと通院しながら四年間、傷は良くなるが、通院しなかつたのです。